Diploma Programme
Programme du diplôme
Programa del Diploma

Japanese A: literature – Higher level – Paper 1
Japonais A : littérature – Niveau supérieur – Épreuve 1
Japonés A: literatura – Nivel superior – Prueba 1

Friday 4 November 2016 (afternoon)
Vendredi 4 novembre 2016 (après-midi)
Viernes 4 de noviembre de 2016 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

Instructions to candidates

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a literary commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is **[20 marks]**.

Instructions destinées aux candidats

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire littéraire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est de **[20 points]**.

Instrucciones para los alumnos

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario literario sobre un solo pasaje.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es **[20 puntos]**.

8816 – 0113
© International Baccalaureate Organization 2016

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

https://xtremepape.rs/

次の文章と詩のうちどちらか**一つ**を選んで文学論評を書きなさい。

1.

太陽から届く温かな熱が首のうしろに心地よくあたっていた。僕はコジマの顔をちらりと見て、眠そうだなと思った。電車はよく似たリズムを繰りかえしてゆれながら、田んぼのなかを走っていった。

「言葉がなかったら、どんなふうなんだろうって、ときどき思うことあるんだよ」と僕はなんとなく言った。

「でもさ、人間だけだよ、言葉を話すの。犬も、制服も机も花瓶も、しゃべったりしないよ」とコジマは僕の顔を見て言った。

「そうだね。物のなかで僕らは圧倒的に少数派なんだけど」と僕は言った。

「言葉でああだこうだ話して、それでなんだかんだ問題をいっぱいつくって色々やってるのがこの世界で人間だけだなんて、考えてみればちょっと馬鹿みたいだね」コジマはそう言うと鼻をすんと鳴らして笑った。僕はそうだね、と言って肯いた。

電車はがたごとと規則的な音を立てて、ほとんどおなじくらいの間隔で駅に停まりつづけた。そのたびに車内には駅の名前を読みあげる車掌の声がひびいた。マイクを切るたびにする、ぼすっという音がこそばゆくて面白い、と言ってコジマはくすくす笑った。青々とした田んぼはまだつづいていて、小さな家が気ぜわしく飛び、ぴんと尖った草のさきの鋭い光が点滅しながら僕たちの速さにあわせて流れるので、それは光のラインのように見えるのだった。

「ねえコジマ」僕は思いだしたように言った。

「いま僕たちがむかってる天国っていうのは」

するとコジマは目をほそめて首をふった。

「ノーです。天国じゃありません。ヘヴンです」

「ヘヴン」

「そう。ヘヴン。う、に点々のヘヴンです」

「ヘヴン」とぼくは復唱した。

コジマはにっこりと笑った。

「そう。でもまだ言えません。ついたらわかりますから、がまんです」

僕が肯くとコジマも満足そうに肯いてみせた。それからまた黙って窓の外を流れる景色を眺めながら電車にゆられていた。

「……でも、さっき君の言ったこと、なんか、わからなくもないな」とコジマはしばらくしてからぽつりと言った。

「机とか花瓶とかは、見た目に傷はついても、やっぱり、傷つきはしないように見えるもの」

「それは、もしも傷ついていたとしても、机や花瓶は誰にもそれを言うことができないから、そんなのはないってこと？」と僕はきいた。

「わからないけど、そうかもしれない」とコジマは言った。

https://xtremepaper.rs/

「机も花瓶も、傷はついても、傷つかないんだよ、たぶん」とコジマはつぶやくように言った。
「うん」と僕は肯いた。
「でも人間は、見た目に傷がつかなくても、とても傷つくと思う、たぶん」とコジマはさっきにくらべてもっと小さくなった声で言い、それきり黙ってしまった。
　コジマの指さきはずっと手さげの猫の顔あたりをこすっていた。僕もそれを見ながら黙っていた。電車はつぎの駅に停車してドアがひらき、何人かが降りて入れ替わるようにして何人かが乗り込み、それからまたゆっくりと動きだした。それからしばらくすると、コジマは、ひとことひとことを確かめるみたいにして言った。
「……わたしたちがこのままさ、誰になにをされても誰にもなにも言わないで、このままずっと話さないで生きていくことができたら、いつかは、ほんとうの物に、なれますかね」
　なんと言っていいのかわからなくなり、僕は黙って床に目をやった。光がすべての窓から入りこんであふれている車両のなかで、コジマの運動靴は汚れていて暗い色をしていた。白く見える部分はどこにもなかった。
「つまり」と僕は言った。
「花瓶や机には、……本当の意味ではなれないかもしれないけれど、物のふりをすることはできるんじゃないかなとか思う。つまり」
「つまり」とコジマも言った。
「僕たちは」と言いかけると、コジマがそれをさえぎった。
「わたしたちは、いまでもじゅうぶん物みたいなものなのだった」と言って、下唇をかるく噛んで笑った。
「本当の物にはなれなくても、いまだってじゅうぶん物みたいなものなのだもの」
　そういうとコジマは髪のなかに右手を入れてゆっくりとかきまわし、じっと黙っていた。そしてじっと手さげの猫の顔を見つめていた。僕もおなじところをじっと見ていた。
「みんな、物だもの」と、僕はなんとなく言ってみた。
「そうだもの」とコジマが言った。
「仕方ないもの」と僕が言うと、コジマが声を小さくだして笑って、それにつられて僕も笑った。
　電車はゆるいカーブをゆき、それにあわせて窓の外の家並みが斜めになったり遠くなったりを繰りかえした。
「問題は」としばらくしてから、コジマは大きく息をついた。
「物は物でも、たとえば、壁にかかってる時計みたいには誰も放っておいてくれないこと」とコジマは言って、それから窓の外に目をやりながら「だもの」とつけくわえて、僕の顔を見て笑った。
「ねえ、もうすぐついてしまうよ」

川上未映子『ヘヴン』（二〇〇九）

Turn over / Tournez la page / Véase al dorso

https://xtremepaper.rs/

2.

チャーリー・ブラウン

後退する。
センター・フライ[1]を追って、
少年チャーリー・ブラウン[2]が。
ステンゲル[3]時代の選手と同じかたちで。

これは見なれた光景である。

後退する。
背広姿の僕をみとめて、
九十歳の老婆・羽月野かめが。
七十歳のときと同じかたちで。

これも見なれた光景である。

スヌーピーを従えて、
チャーリーに死はない、
羽抜鶏を従えて、
老婆に死はない。
あまりに巨大な日溜りのなかで紙のように、
その影は、はじめから草の根に溶けているから。

（次ページに続く）

https://xtremepaper.rs/

そんな古里を訪ねて、
僕は、二十年ぶりに春の水に両手をついた。
水のなかの男よ。それも見なれぬ……
君だけはいったい、
どこでなにをしていたのか。
どんなに君がひざまずいても、
生きようとする影が、草の高さを越えた以上、
チャーリーは言うだろう。
羽月野かめは言うだろう。
ちょっと、そこをどいてくれないか。
われわれの後退に、
折れ曲がった栞[4]をはさみ込まれるのは、
迷惑だから、と。

清水哲男『スピーチ・バルーン』（一九七五）

---

1 センター・フライ … 野球において、外野の守備位置センターに飛んできた球。

2 チャーリー・ブラウン … アメリカの漫画「ピーナッツ」及びアニメ「スヌーピーとチャーリー・ブラウン」の主人公。趣味は野球。

3 ステンゲル … アメリカ・ニューヨーク・ヤンキーズの監督として優れた戦術を駆使して、一九四九年から一九五三年までワールドシリーズ五連覇を達成した。

4 栞（しおり） … 本のページに目印を付けるものや初心者のための手引書・案内書。元々は、山道などで迷わないように木の枝を折って目印にした道しるべのこと。

https://xtremepaper.rs/